

製糸機械の変遷

＊まえがき＊

蚕の繭から生糸を作る技術を製糸と言います。19世紀初頭に養蚕・製糸技術が農業技術書のひとつとして一般に作られました。幕末の開国を機に輸出を始めた生糸は富岡製糸場などの仏伊の製糸技術を我が国流に咀嚼し、昭和初期には輸出商品として大成するに至りました。

初期の繰糸機から戦後の製糸機械まで、時代による変遷をお話します。

場所:東京農工大学科学博物館 3階講堂

時間:各回13:30~15:30(全4回)

講師:三戸森 領夫氏

(元農水省横浜農林規格検所長、日本シルク学会名誉会員)

申し込み方法:当日会場へお越しください

第1回〈6月7日(土)〉繰糸機~丑首から多糸機まで~

江戸時代(享和・文化年代)に農業技術書のうち蚕書が100冊刊行されました。この時代に使用された丑首から昭和初期に実用化された多糸繰糸機までについてお話します。



丑首

第2回〈9月13日(土)〉繰糸機~自動繰糸機~

多糸繰糸機に続いて自動繰糸機の研究が始まりましたが、実用化されたのは戦後でした。片倉、たま(後のニッサンプリンス)、恵南、郡是(ゲンゼ)が実用化に成功し、日本の、そして世界の製糸業を支えました。



ニッサン自動繰糸機
HR-2型

第3回〈12月13日(土)〉乾繭機と煮繭機

季節の生産物である繭を大規模に集中して乾燥する機械(乾繭機)と繭を煮る機械(煮繭機)繰糸機に次いで重要な二つの機械についてお話します。

第4回〈2015年3月7日(土)〉工場生産の中の機械の選択

製糸工場はその立地条件、すなわち原料の繭の品質や使う水の性質などに生産が左右されます。戦後の製糸工場の機械の変遷と、主要機械をつないだり小さな工程で使われる機械・装置についてお話します。



東京農工大学
科学博物館

